

おわりに

森林動物研究センターが2007年に設立されてから、18年が経過いたしました。当初は、野生動物の生息状況や出没要因、施策に反映させるための具体的な数値根拠を示すことは、非常に難しい状況でした。指標によっては、安定した数値が得られない、あるいはさまざまなデータが異なる結果を示す場合もあるなかで、意思決定をしなければならない場面に直面しました。逆に、意思決定できないことも少なくありませんでした。2010年にはツキノワグマ、イノシシの大量出没やニホンジカの被害最大化など様々な軋轢が深刻化していました。被害が拡大する中であっては、得られたデータから判断可能なことについては、可視化し、その根拠に基づいた政策転換が行われました。すぐには状況が変わらなかったこともありましたが、毎年の取り組みやデータ収集により、次第に政策の変化に伴う指標データの反応を観察することもできるようになりました。

このような活動を継続する中で、地道なモニタリングデータの重要性を確信し、さらなる充実化をめざすとともに、新技術などを導入した新たなモニタリング手法の開発やデータ蓄積など試行錯誤を繰り返してきました。この十数年間は、必要なデータや長期でとるべきデータなどの知見が蓄積していき、多獣種を同時にモニタリングすることも可能となってきました。しかしながら、深刻な被害が回避された地域や獣種がある一方で、分布拡大による新たな地域での出没や被害も確認されています。

今回のモノグラフでは、長期モニタリングデータ分析による兵庫県の野生動物管理の到達点と今後目指すべき方向性を一部示すことができたのではないかと考えております。特定計画制度が始まってすでに26年が経過、兵庫県で最も古いニホンジカでも24年が経過しています。改めて、捕獲と防護の取組の重要さと困難さが示された状況ですが、人と野生動物との共存の方向性も明らかにもなったかと思えます。そして、モニタリングは、淡々と続けることにより、多様な分析に供することができるということも示すことができたと思えます。今までの成果が将来にわたって続けられるように今回示された課題などを一つずつ解決しながら次の10年をめざしていきたいと思えます。

最後になりましたが、査読責任者の藤木大介主任研究員をはじめ、論文査読にご協力いただいた方々、調査や施策立案などに貢献していただいた行政、市民の皆様はこの場を借りて、心より感謝を申し上げます。

兵庫ワイルドライフモノグラフ編集委員会
責任編集者 横山真弓